

# James Joyceの文体—Ulyssesにおける 意識の流れの文体\*

古 川 洋 子

この論文の構成を見てみると、まず最初にUlyssesについての紹介的なことが述べられており、次に「意識の流れとその背景」、「意識の流れの文体」、「結論」という順になっている。その内容について少し詳しく見てみよう。

◎意識の流れとその背景——19世紀末から20世紀前半にかけて、小説の方法として三つの顕著なものがある。その一つとして、Joyceによる意識の流れを不安定な状態のまま捕捉する独白という形式がある。そして、近代文学の起点である「内なる声で自己を語る」という線にそって、理論的なフランス人により、内心の分析、心理的陰翳の正確な把握という方法で続けられた。特に散文においては主として、現象や心理の細かい変を映してゆく手法となり、これが「意識の流れ」と呼ばれたのである。

◎意識の流れの文体——UlyssesにおいてJoyceは、様々の文体や手法を企てているが、その根本的なものは、「意識の流れ」の手法である。そしてJoyceは、これを内的独白という方法で表現している。この文体を研究する上で、次のような項目に分けて研究をすすめている。

## 用語の選択

- 1.造語      2.擬音語      3.形容詞の多様性

## 構文の特異性

- 1.語句の反復      2.音の反復      3.語句の縮約      4.語順の変遷

## 表現の特異性

- 1.引用      2.比喩

- 感覚的表現      言語断片      3人称と1人称の交錯      性格描写

## ◎結 論

Joyceのやったのは、意識の流れを文学の記述上、一層理知的に精密に描写するテクニックであり、必ずしも心理をそのまま表現することを目的としていないようである。Ulyssesにおける「意識の流れ」は、方法論の上で問題はあるが、それでもJoyceは、登場人物の徹底的な再検討、そのための人間の深層への掘り下げ、理智、思维的機能の排除、究極としては人間の赤裸々な精神と肉体との曝露にまで行こうとしている。そうになると、在来の形ではその内容をもり得ないので、形式の改革が生じてきたのである。      (文責 小野正恵)